お浄土をしのんで

中陰掛け七日七日の法語

※裏面の初七日の項を表にして、お仏壇のそばの壁などにお掛けいただき、七日ごとに切り取ります

初七日

しょなぬか

ピクニックに行って、野草を摘んでいた小学校低学年の女の子が、「さあ、お父さんお母さんにバイバイしなさい」と、野原に向かって手の小さな花束を振りました。その心やさしい言葉を聞いたとき、女の子のお母さんは、わけもなく胸があつくなったといいます。

一茎の野草にだって、父母がなければ可憐な花をつけることはできません。そしてその花もまた、それ自身がお父さんお母さんになって、種を後世につたえていく営みにほかならなかったのです。世の生きとし生けるものすべて、こういういのちのなかに生かされて在ります。

無量寿

三百年も四百年も前まで、ご先祖の名がはっきりしているという家があります。が、それから先は不明で、遠祖のもっともらしい名もアテになりません。けれども、わからないから、信じられないからご先祖がなかったわけではなく、何千年も何万年も、いや人類発祥以前からのいのちを、いま、私たちは、いただいているのです。

無量寿――「限りないいのち」とは阿弥陀如来のお徳の一つをあらわす真実の言葉です。

二七日

ふたなぬか

世に、お母さんの胸に抱かれた赤ちゃんの笑顔ほどうつくしいものはないといわれます。まったく無心に、お母さんにまかせきった世界だからです。突飛な空想ですが、もしかりに、赤ちゃんが言葉をあやつることができて、「お母さん、しっかり育児をお願いしますよ」と言ったらどうでしょう。お母さんは、おどろいて腰を抜かすでしょうし、その笑顔のうつくしさは、たちまち色あせたものとなるはずです。赤ちゃんは無心だから満ちたりた笑顔を見せるのであり、それは、お母さんのほうから、どうか丈夫に育ってほしいと願わずにはおれない営みのなかにつつまれたうつくしさでもあるのです。

本願名号

「本願」とは、み仏の願いです。阿弥陀如来のほうから、我が国（浄土）に生まれんと欲するものすべてを救わずにはおれないという誓いを立てられ、その誓願は成就されました。私たちは、こちらからお願いするまえに、み仏から願われているのです。願われつづけてきたのです。

その尊いお徳のすべてが「南無阿弥陀仏」のお名号にこめられています。ですから、私たちがみ仏のお誓いを信じて「南無阿弥陀仏」とおとなえしたそのお念仏は、私がとなえようとしてとなえたお念仏ではなく、み仏の、お呼び声といただかれるのです。

三七日

みなぬか

仕事やつき合いで、夜おそく帰宅するときは、かならず子供のためにおみやげを買ってくるというお父さんがいます。すし折だったりタコ焼きだったり、アイスクリームだったり、わずかなものなので、食べ盛りの子供たちは奪い合うようにして、たちまちのうちに平らげてしまいます。それをお父さんは、いかにも満足そうに眺めています。子供たちのよろこびは、そのままお父さんのよろこびです。なんとも微笑をさそう光景です。けれども、これを無条件に父と子の情愛のあらわれとみてしまうのには、ちょっと抵抗があります。子供たちにとって父親とはイコールおみやげではないはずです。

タコ焼き一個をよろこぶまえに、父母のいつくしみのなかで育てられていること自体をよろこぶべきではないでしょうか。

大慶喜

慶も喜も、ともに「よろこぶ」の意です。大慶喜心とは、信心をあらわします。もとより救われざる身が、み仏の願いによって救われるという、これにまさるよろこびはないはずです。それなのに、心から踊り上がるほどのよろこびがわかないのも「煩悩」のせいだと宗祖ご自身が述懐されました。目先の欲望にとらわれて、真実の見えない自分を見つめられたのです。

四七日

よなぬか

戦後すっかりおなじみになった催しの一つに、ミス・コンテストがあります。世界的規模で行われるものから、商店連合会などの地域的な規模のものまで、はたち前後の娘さんが妍をきそい、それぞれのミスを冠した美女がえらばれます。ひところ「八頭身」という言葉がもてはやされたように、あくまでも容姿の上でのうつくしさが美の基準です。ところが、この娘さんの五十年後は、どうでしょうか。残念ながら、それは保障のかぎりではありません。なぜならば、おばあちゃんのうつくしさは、容姿より内面や生き方が問われるからです。

「分陀利華」とは、古代インド語のプンダリカを漢字にあてたもので、真っ白な蓮華を指し、もっとも美しい花とされてきました。そして、み仏の誓願を信じ、大悲に照らされた人は、この花のように美しいとお釈迦さまがたたえられ、それは「我が良き親友」だとさえ語りかけられました。もったいないことです。思えば、生きていく上でつねに人を傷つけ、罪をつくり、地獄よりほかに行きどころのない、この私です。だから「地獄は一定」と述懐された宗祖のお言葉にみちびかれてお念仏を称えさせていただくことは、花のようにうつくしい生き方だといわれるのです。

分陀利華

五七日

いつなぬか

帰楽邦

焚焼仙経帰楽邦――正信偈に述べられているこの一行は、宗祖・親鸞聖人が本師とあおがれた曇鸞大師のエピソードが有名です。大師はもともと仙人の修行をしていました。なんでも樹の上に坐っていたといいます。その下を、インドから経典の翻訳のために中国に渡ってきていた菩提流支三蔵が通りかかり「何をしているのか」と問いかけました。「ご覧のとおり仙術を行じている。この術が完成したら二百年、生きることができるのだぞ」。それは、どうだ驚いたか、という口調でしたが、三蔵はすこしも驚かず「では二百一年目はどうなっている？」と問いかえしたのです。一瞬、行者は絶句し、樹の上から転がり落ちました。そうです。たとい二百年という驚異的な長寿を得ても、人はかならず死ぬのです。その当然すぎるほど当然の道理を指摘されて、行者は目がさめました。楽邦（お浄土）に帰すとは、たといこの肉体はほろびても、永遠のいのちに生かされる弥陀如来のおはたらきにすべてをおまかせすることです。

曇鸞大師はいまからおよそ千五百年もまえの古い中国の高僧です。六十七歳で世寿をまっとうされました。が、その教は宗祖を通して、千五百年後のこんにちまで生きつづけています。

六七日

むなぬか

風邪で二日ほど休んだ子が、熱も下がったので元気に幼稚園の通園バスに乗り込んでいきました。町角で見送って家に帰ったお母さんは、家事にとりかかりましたが、子供のことが心配で気が気ではありません。手は動かしていても、心は幼稚園の子供のもとに飛んでいます。また熱を出したのではないか、倒れて医務室へ運ばれてはいないだろうか……電話のベルが鳴ると、思わずギクリとして、幼稚園からではないとわかると、ほっと胸をなでおろすのです。けれども、子供にとっては、そんなことはわかりませんから、幼稚園から帰って、病後の体に異常がなかったかをしつこくたずねる母親に、面倒くさそうにナマ返事をするのが関の山です。

大悲無倦

煩悩障眼雖不見、大悲無倦常照我

——煩悩に眼を障えられて見たてまつらずと雖も、大悲(は)倦きことなくて常に我を照らしたまう——私たちは、あらゆる欲望を切り離して生きてゆけません。もっと欲しい、もっと欲しいという思いがバネになって、生活を向上させていると言えます。そういう目先の欲望のために、真実への視界がさえぎられているのが人間です。だからこそ、み仏は私たちの目には見えませんが、常に私たちを照らして下さっているのです。

七七日

しじゅうくにち

電車で、小学生の遠足と乗り合わせた経験はありませんか。あの騒然たる音声の渦中にまき込まれたかたはありませんか。引率の先生がいくら制止しても子供たちの口を封じてしまうことはできず、まったく耳をろうせんばかりの音声に辟易させられるのが普通です。そこで、もし今度、そういう機会があったら、この騒音に、ほかの乗客のどういう人が鋭敏に反応するか注意してみませんか。かりに、露骨に顔をしかめたのが、同年期の子育てを終えた年代の中年婦人だったら、それは他人事ではありません。このご婦人は、かつて自分の子供も同じようにあたりに迷惑をかけていた事実に思いが至らず、心の中で「なんという行儀の悪さでしょう。こんなシツケをしたお母さんの顔が見たい」と罵りつづけているかも知れません。とすると、ご婦人の心の中の叫びは、むしろ子供たちの騒ぎより、もっと騒然としているといえます。こういう手前勝手な怒り、腹立ちは「瞋恚」といい、人間の煩悩の一つです。

入寂静

寂静に入る――寂も静も「しずか」を意味します。お浄土の清らかさというのは、そうした騒然たる心のさわがしさが、いっさいなくなった、すがすがしい世界だといえましょう。

百カ日

ひゃっかにち

高校野球のテレビ中継で、大活躍した選手の両親がインタビューを受け「息子のことより、チームが勝ったほうが嬉しい」と語っていました。それを見ていた同じような経験をもつお父さんが「立派だなあ」と皮肉まじりの感想を洩らしました。自分の場合、とてもチーム本位どころか、自分の子供の働きばかりが気になったというのです。むしろ、チームの勝敗より、自分の子がいいところを見せてくれたらいいというのが、本音だったと告白しました。もちろん、どちらも本心にはちがいなく、どちらも、「親心」をいいあらわして共感をおぼえずにはおれません。しかし、わが子だけしか頭になかったお父さんを「立派だ」とならせたお父さんにしても、まさか相手チームを声援するという気には、とうていなりません。それが人情というものでしょう。

拯済無辺

そうした人情の世界での限界を思うにつけ、み仏の誓願の尊さ、たのもしさを仰がずにはおれません。み仏の拯済（お救い）は、ほとりなく（無辺）およぶと宗祖・親鸞聖人はよろこばれました。ここまで、という限界はなく、むしろ罪深いわれら、心のよごれきったわれわれ（極濁悪）を、この上もなくかなしんでくださって、救わずにはおれないという、み仏の誓願だからです。

お仏壇のないご家庭は四十九日までに

分家初代のご家庭では、お仏壇のないところもあるようです。お仏壇とは、仏さまのお館です。その仏さまとは、亡き人を含めた私たちすべての凡夫（煩悩そのものの人間）を、お浄土に救わずにはおれないという、たのもしい願をおたてくださった、ご本尊・阿弥陀如来のことです。

ですから、もしお仏壇のないご家庭は四十九日といわず、早い時期にお迎えします。また、お仏壇を選ばれるにあたっては、安価高価、大小は問いませんが、仏壇店では、かならず「浄土真宗の××派」と宗旨を正確に伝えるようにしてください。お仏壇には迷信がつきものですが、気にする必要はありません。

ご本尊は本山から授与してもらいます

お仏壇を購入するとき、なにはおいても、まず、ご本尊をお迎えしなければなりません。浄土真宗のご本尊は、もちろん阿弥陀如来です。とくに一般のご家庭では、「方便法身の尊形」といわれる絵像の掛軸を、お仏壇の最上段・中央にお迎えします。また、「南無阿弥陀仏」の六字名号の掛軸の場合もあります。

そして、ご本尊の左右両脇には、お脇掛（向かって右に〝帰命尽十方無碍光如来〟の十字名号、左に〝南無不可思議光如来〟の九字名号か、右に宗祖・親鸞聖人、左に、その宗派にとくに貢献のあった高僧＝例えば東、西本願寺では蓮如上人の肖像を配します。

これらご本尊やお脇掛は、いわゆる美術工芸品ではありませんので、お手次のお寺（ないしは直接）を通して、本山から授与（または交付）していただくようにし、さらに、お仏壇に合わせた大きさのご本尊でなければなりませんので、この点は、お仏壇を購入したときに、サイズ（五十代、百代などと表示されている）を、はっきりたずねておきます。

なお、ご本尊をお迎えしたら、「入仏式（慶讃法要）をつとめます。

お寺の法要や行事にお参りください

お寺では、一年を通してさまざまな法要や行事がつとめられています。たとえば、お正月の修正会、春秋の彼岸会や永代経、お盆（盂蘭盆会）がありますが、なんといっても浄土真宗では、多くの人人が集い盛大につとめられるのが「報恩講」です。これは、宗祖・親鸞聖人のご命日に、そのお徳をしのんでつとめられるものです。ご命日とは弘長二年（一二六二）十一月二十八日（太陽暦で一月十六日）ですが、法要の日取りは、お寺によって異ります。

探究社　〒六〇〇―八二六八 京都市下京区七条通大宮東入大工町一二四―一
電話075（343）4121番・振替01030―6―21185

●中陰掛け